

平成20年度地域ICT利活用モデル構築事業 成果報告書

実施団体名 豊後高田市

代表団体名

事業名称 ICT技術を活用した地域医療高度化モデル事業

1. 事業実施概要

市民の誰もが健康で安心して暮らせる生活環境を実現するため、市内全域に整備する高速情報通信網を活用し、本市と大分大学及び地元医師会との連携により、医療・福祉分野におけるソフト面での環境整備を行うものである。

具体的には、ICT技術を活用して大分大学と市内の医療機関を結び、遠隔画像診断システムを構築することにより、市内の各診療所等で撮影したレントゲン、CT画像等を画像診断専門医が行うことにより都市部の病院と変わらない高水準の医療サービスを実現することにより、都市との医療格差を是正し、住民福祉の向上と地域振興を目指すものである。

2. 目標の進捗状況

指標	目標値	結果の数値	達成状況	計測方法・出展等
各診療所等におけるモデル事業による診断件数	1月当たり150件	本稼動してから 3週間で97件 1月当たり130件	△	市医師会からの報告

3. 達成状況が△又は×の場合はその理由

複数の診療に参加する大規模な取組みのため、運用体制の確立に時間を要し、平成21年3月5日までは試験運用の状態であった。

3月6日から本格稼動の状況となり、現在、順調に診療件数が増えつつあるが、3月26日時点で調査したため、目標数値に届かなかったが、今後は、目標数値を上回る見込みである。

＜委託業務説明書＞

1 平成20年度事業実施において明らかとなった課題

今回のモデル事業について現状では特に問題はないが、今後は、読影症例数を増やし、精査や専門医受診が必要な症例に対する地域基幹病院や大学病院中心としたバックアップをより円滑に行っていくこと、本システムが各契約医療施設に及ぼす利点や問題点を抽出して、改善を図っていくことが課題である。

2 自律的・継続的運営の見込み

本事業では大学発のベンチャー企業に画像や依頼内容の分配・配信・科金業務を委託することにより、地域中核病院と大学読影者間の通信や連携業務が円滑に行うことができ、かつ両施設の人的負担も軽減された。また、読影料や通信料、システムの保守料金などの運営コストに関しては、中核病院で放射線科専門医師が診断に携わることにより、読影を依頼する6診療所では遠隔画像診断管理加算が可能となり、それによりある程度自主採算性が確保され、かつ小額ではあるが診断医の画像診断レポート作成料金も支払われる。

将来にわたる永続・発展性のあるシステム構築のためには、これらの採算性や課金制も重要な点と思われる。

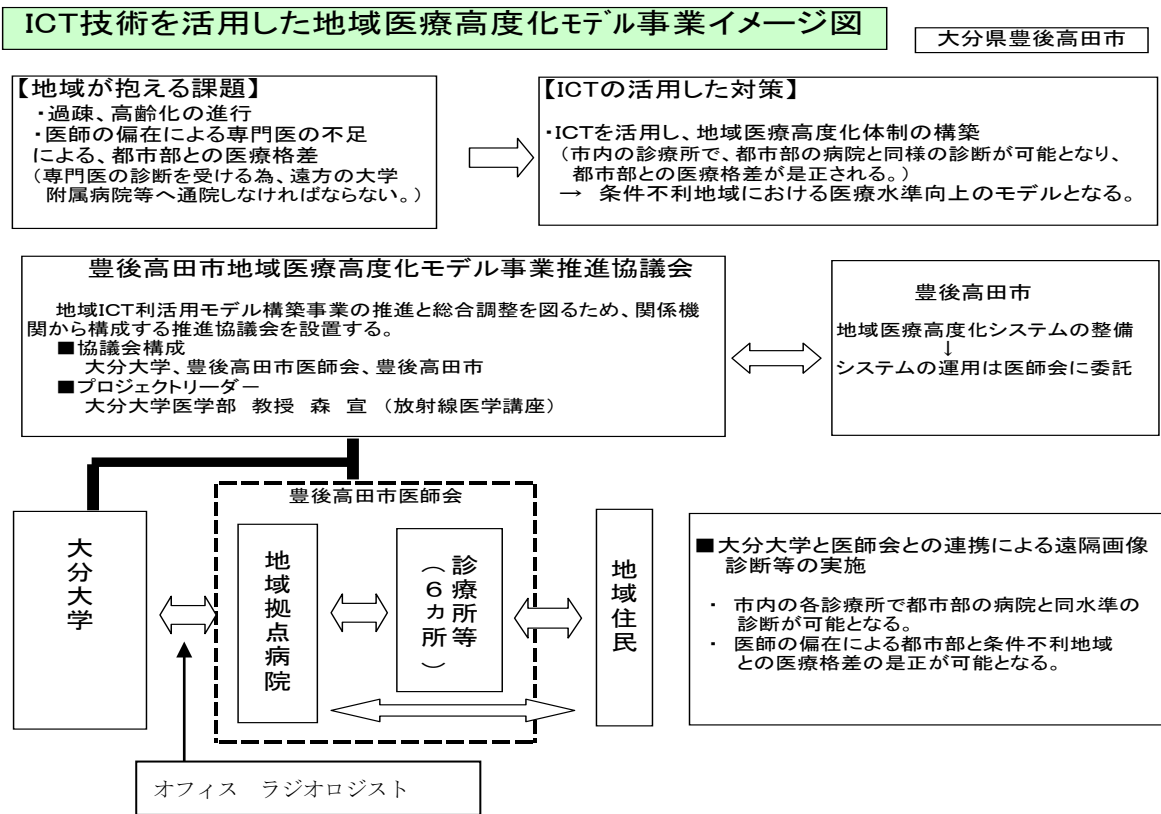
3 今後の展開方針

現在、遠隔画像診断システムは、医療の地域格差是正のための一つ的手段として有用視されている。本モデル事業の運用をきっかけとして地方自治体の支援の元に、大学病院と地域拠点病院、中小規模診療施設がネットワークにより結ばれて相互連携を図っていくことは、画像診断にとどまらず、理学診断、病理診断や内視鏡診断など他の医療情報へと応用を展開していることが可能である。

さらには今後、統合プロファイリングを構築することで、地域が大きな一医療機関の如く機能し、結果的に住民への医療福祉サービスの改善へとつながる展望も期待できる。

<実施体制説明書>

1 実施体制



2 各主体の役割

N0	名 称	役 割
1	豊後高田市地域医療高度化モデル事業推進協議会	豊後高田市、大分大学及び豊後高田市医師会で構成される地域医療高度化モデル事業の推進と相互調整を図るために設置する協議会であり、事業の推進母体である。
2	大分大学	地域医療高度化システムの提案及び遠隔読影診断など専門的な支援
3	豊後高田市医師会 （地域拠点病院及び診療所等）	地域医療高度化モデル事業の実質的な運営主体 拠点病院にはサーバ機器を設置し、各診療所等と大分大学とのハブ的の役割を果たす。
4	豊後高田市	地域医療高度化システムの整備及びモデル事業の申請窓口

事業実施進行表

実施内容	12 月	H21 1 月	2 月	3 月
協議会等設立・準備 会合	△			
協議会等開催	△			△
システム構成の検討・決定	→			
システム構築に係る 競争入札	△			
システム構築		→		
システム稼働		→	→	→
報告書作成				→

平成21年3月31日

平成20年度地域ICT利活用モデル構築事業 システム設計書

実施団体名：豊後高田市

代表団体名：

事業名称：ICT技術を活用した地域医療高度化モデル事業

1 概要

豊後高田市が整備した光ファイバーネットワークを活用し、市内の各診療所等（モデル事業参加医療機関）が撮影した単純X線写真・CT画像等の内、専門医の読影を希望する症例に関して、その画像および臨床情報が各医療機関に設置された画像送信端末より拠点病院（高田中央病院）へ転送され、同病院内のFlexサーバーに順次蓄積される。

その画像をインターネット回線を活用して、大分大学医学部の画像診断専門医が診断し、各診療所等へ診断結果を報告するものである。

2 運用結果

今回のモデル事業では、業務の効率化を図るため、大分大学の遠隔画像診断サービスベンチャー企業である【オフィス ラジオリジスト】が、Flexサーバーの登録症例について、大分大学医学部放射線医学教室画像診断専門医への依頼、分配・配信業務を担っており、同社を中継して分配・配信された症例を大学内の読影担当専門医が医局の読影専用端末にてサーバーへアクセスして、画像の閲覧とレポート作成を行う仕組みとなっている。作成されたレポートは、拠点となる高田中央病院内のサーバーに返信され、同病院の常勤放射線専門医師によるダブルチェック（承認）を受けた後に依頼元である各診療施設へ返信される。

検査の読影依頼登録から読影レポートの返信に至る一連の流れは、読影依頼登録日に終了し、依頼医は迅速に専門医による読影結果を知ることができることとなっている。

試験運用の期間を経て、3月6日～26日の期間に97件の遠隔読影依頼登録があり、放射線医学教室にて画像診断を行った。その内65件に何らかの異常所見が指摘され（有所見率67%）効果をあげている。

今回のモデル事業で導入したシステムはWebベースであり、フレキシブルな運用が可能であるとともに高品位な画像診断ができると医師の評判も良い。

自治体と地域の医師会及び大学の3者が連携し、このシステムを活用することにより地域の医療水準を高めることができ、住民福祉の向上につながった。

3 課題・改修の必要性

今回のモデル事業について現状では特に問題はないが、今後は、読影症例数を増やし、精査や専門医受診が必要な症例に対する地域基幹病院や大学病院中心としたバックアップをより円滑に行っていくこと、本システムが各契約医療施設に及ぼす利点や問題点を抽出して、改善を図っていくことが課題である。

4 その他